

今週の為替相場見通し(2018年7月30日)

| 総括表 | | 先週の値動き | | | 今週の予想レンジ |
|----------|------|--------|-----------------|--------|-----------------|
| | | 注 | レンジ | 終値 | |
| 米ドル | (円) | | 110.58 ~ 111.54 | 111.02 | 108.70 ~ 112.70 |
| ユーロ | (ドル) | | 1.1620 ~ 1.1750 | 1.1652 | 1.1500 ~ 1.1800 |
| (1ユーロ=) | (円) | | 129.14 ~ 130.70 | 129.44 | 127.50 ~ 130.50 |
| 英ポンド | (ドル) | | 1.3072 ~ 1.3213 | 1.3111 | 1.2950 ~ 1.3200 |
| (1英ポンド=) | (円) | * | 145.27 ~ 146.54 | 145.51 | 144.00 ~ 146.50 |
| 豪ドル | (ドル) | | 0.7359 ~ 0.7464 | 0.7404 | 0.7300 ~ 0.7500 |
| (1豪ドル=) | (円) | * | 81.81 ~ 82.90 | 82.16 | 80.50 ~ 83.50 |

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

為替営業第二チーム 山本 一暁

(1)今週の予想レンジ: 108.70 ~ 112.70 円

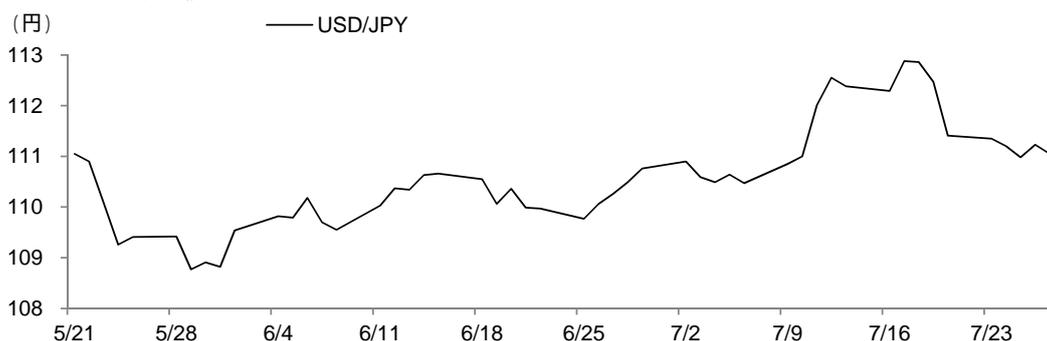
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のドル/円相場は、上値重く推移した。週明け23日、トランプ米大統領による利上げ牽制コメントを背景にしたドル安地合に加え、「日銀、金融緩和の副作用を和らげる方向で政策修正を検討」との報道を受けた円長期債利回りの急上昇を受けてドル/円は110.85円まで円買いが進行。その後、日銀が指し値オペを実施すると111円台をつけたが、日経平均株価の下落に110.75円まで戻り売られる展開。海外時間では、円債利回り上昇につられてか米債利回りも上昇、ドル買戻しが強まると、ドル/円についても短期的なショートカバーが入り、一時週高値となる111.54円まで反発を見せた。24日、人民元のフィクシングレートが約1年ぶりの元安水準に設定されると、ドル/円は111円台半ばから111円台前半まで売られるも、その後、中国国務院による一段の積極財政政策への期待感から上海株が上昇すると、111円台半ばまで反発。米株の底堅さに支えられ概ね111円台前半で揉み合った。25日、海外時間に米紙が、年内の自動車関税賦課の可能性を報じたことと、日経新聞が日銀によるETF購入配分見直しと報じたことが相俟って円買いが強まると110.67円まで下落。その後、米欧貿易摩擦懸念が和らいだことで、米株上昇を横目にドル/円も買い戻され、111円台を回復した。26日、日銀金融緩和観測から円長期債利回りが再び上昇する流れにドル/円は売り優勢の展開。指値オペが見送られると、週安値となる110.58円まで下押された。海外時間、ECB政策理事会後にユーロ安となり、相対的にドルが強含むと、ドル円は111円前半まで値を戻した。27日、米4~6月GDPが市場予想通りの結果になると、やや期待感が高かっただけにドル/円は110.80円まで売られたものの、米株安が一服すると111円台前半まで反発して越週した。

今週のドル/円相場は、神経質な展開を予想。今週は30、31日に開催される日銀金融政策決定会合に最も注目が集まる。先週から地ならしともとれる観測記事が散見されているだけに、円ショートポジションは既に一部解消されていると考えられるものの、実際に、現行の金融緩和の方向転換が示唆されれば、円買いが加速することが予想される。ただ、新たな方針が、金融緩和を長期化させる為の微調整に過ぎないと市場で解釈された場合、金融緩和出口戦略の後退と捉えられ、ここもとのドル/円下落についてはショートカバーが入りそうだ。事前のオプション市場でのボラティリティのレベルを見ても、結果の如何にかかわらず、相応のモメンタムを伴った神経質な値動きとなりそうだ。米国でもFOMCが開催され、31日(火)米6月PCEデフレーター、1日(水)米7月ISM製造業景況指数、3日(金)米7月雇用統計等の米重要指標発表も控える。

(3)先週までの相場の推移

先週(7/23~7/27)の値動き: 安値 110.58 円 高値 111.54 円 終値 111.02 円



(資料)ブルームバーグ

2. ユーロ

為替営業第二チーム 上野 智久

(1) 今週の予想レンジ: 1.1500 ~ 1.1800 127.50 ~ 130.50 円

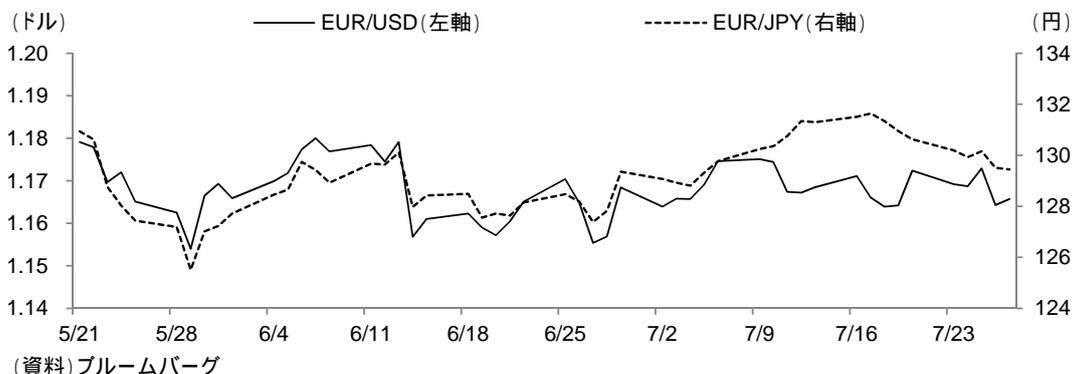
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ/ドル相場はレベルを切り下げる展開。週初23日に1.17台前半でオープンしたユーロ/ドルは、東京時間序盤に週高値1.1750をつけたが、30-31日の日銀金融政策決定会で金融緩和策の修正を行うとの観測からユーロ/円が下落する動きに、1.17台を割り込む水準まで連れ安に。24日は前日に続き軟調な推移となったが、独7月製造業購買担当者景気指数が市場予想を上回ると1.17台前半まで反発する場面もみられた。25日はトランプ米政権の一部顧問は約2000億ドル相当の輸入自動車に対して追加関税が年内に発動されると予想との米紙報道を受け、下落する局面もみられたが、米国・EU首脳会談後の共同会見で、通商摩擦の緩和に努めることで合意との報道が伝わると1.17台前半まで急反発をみせた。しかし26日には、ECB政策理事会後の記者会見でドラギ ECB総裁が、来年の夏までは低金利を維持する方針を改めて表明したことで、独金利が低下するとともにユーロ売りが強まり、ユーロ/ドルは1.16台半ばまで下落。27日は米4~6月期GDPへの期待が高まる中、発表前にドル買いが強まる局面で、ユーロ/ドルは週安値1.1620まで下落。その後はやや持ち直し、1.1652で越週した。

今週のユーロ/ドル相場は、上値の重い推移を予想する。先週のECB政策理事会では政策の現状維持が決定され、理事会後のドラギ総裁の発言も概ね前回時の発言を踏襲したものであり、サプライズなし・想定内の結果と言える。今週は日銀金融政策決定会合(7/30-31)、FOMC(7/31-8/1)などの中銀イベント、米7月雇用統計(8/3)などの米経済指標の発表が続く。特に日銀金融政策決定会合では、イールドカーブ・コントロールにおける長期金利目標や、上場投資信託(ETF)買入れ手法などの柔軟化が協議されるとみられる。消費者物価指数などで物価上昇率の低位推移が確認されている状況下、日銀が金融緩和の旗印を下げる蓋然性は低く、あくまで金融緩和の長期化による副作用への対応というスタンスは堅持するとみられる。しかし、上記の内容が伝わる局面では一時的に円の騰勢がみられる可能性もあり、ユーロ/円の下落、ならびにそれに伴いユーロ/ドルが連れ安となる展開には注意を払いたい。あくまで副次的な影響となるユーロ/ドルは下げたとしても下落幅は限定的なものに留まると考えているが。

(3) 先週までの相場の推移

先週(7/23~7/27)の値動き: (対ドル) 安値 1.1620 高値 1.1750 終値 1.1652
 (対円) 安値 129.14 高値 130.70 終値 129.44



3. 英ポンド

(1)今週の予想レンジ: 1.2950 ~ 1.3200 144.00 ~ 146.50 円

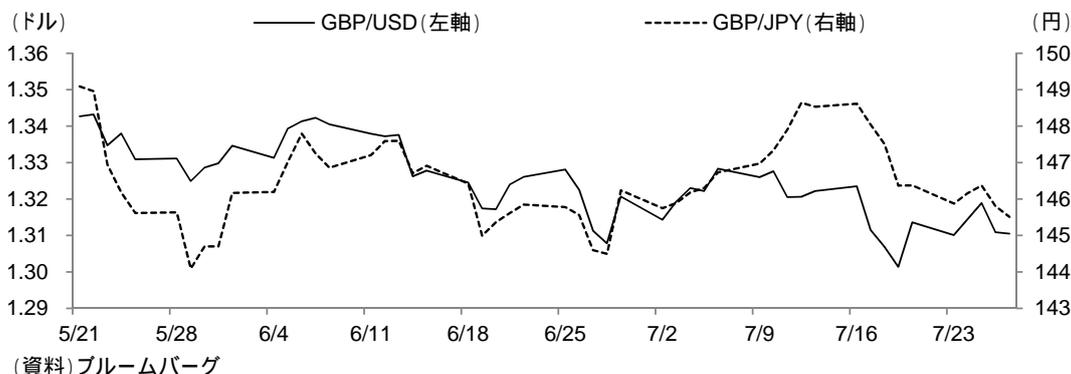
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の英ポンド相場は、もみ合いながら小幅に下落。英国要因というよりは、ECB理事会後のドラギ総裁のコメントや、米トランプ大統領のコメントといった外的な要因に振られる展開となった。週初、先々週末の米トランプ大統領の発言を受けてポンド/ドルは1.3140からスタートしたものの、ドルに買い戻し入る中で終日下落。24日も前日の流れが継続しポンド/ドルは1.3072まで下落したものの、独製造業PMIが市場予想を上回りユーロが買われ、つられてポンドにも買い戻しが入った。午後にはメイ首相の”EU離脱交渉をコントロールする”との発言が好感され、ポンドはもう一段買い進まれた。水曜日は英国議会夏休みで特段材料不足の中、米欧首脳会談がNY時間に控えていることも手伝いポンド/ドルは横ばいで推移。その後トランプ大統領のアドバイザーの話として約2000億の自動車関税が年内に発動される可能性が報じられたことでドル売りが進行し、26日未明には約2週間ぶりの水準である1.3213を付けた。26日のECB理事会はコンセンサス通り金融政策変維持で特段サプライズはなかったものの、ドラギ総裁が記者会見で強気な経済見通しに言及し一時ユーロ買いの流れに。ところが直後に”フォワードガイダンスに変更なし”とハト寄りのコメントが出たことで市場は一気にユーロ売りドル買いに転じた。これを受け、ユーロ/ポンドは一時2週間ぶりの水準である0.8865まで下落。その後ユーロは水準を戻して小幅なレンジで推移したものの、ドル買いの流れは海外時間も継続しポンド/ドルは足元2日間の上昇幅を打ち消す形で下落した。27日も材料不足の中ポンド/ドルは小幅にもみ合いながらも水準を切り下げ、1.3094でNYに渡った。

今週の英ポンド相場は、ヘッドラインに振られながらも上値の重い展開を予想。週中には31日(火)にBOJ、1日(水)にFOMC、2日(木)のBOEと中央銀行のイベントが連なる。イベント待ちの中動意は薄く、週半ばまでは明確な方向感なく推移するだろう。BOJによる政策変更有無は非常に不透明であり、足元観測報道もあったことから注目度も高いため対円での動きには留意が必要だ。一方でFOMCについては利上げなし、BOEでは0.25%の利上げが8割以上市場に織込まれており、相場への影響は限定的だろう。BOEが利上を見送った場合には、現在の折り込みが剥落する形になりポンドは他通貨に対し下落するだろう。英国議会は先週の半ばから夏休み(～9/4)に入っており材料が出にくい中、今週は重要な経済指標の公表が多く控えている。2日(木)には英7月マーケットCIPS英国建設業PMI、3日(金)には英7月マーケットCIPS英国サービス業PMIが公表される。BOEの利上げが意識される中、景気後退の兆しに市場は敏感であり指標の下振れには注意が必要だ。引き続き英国固有の相場材料はEU離脱交渉である。上述の通り英国議会は夏休みに入ったものの、メイ首相は27日(金)さっそくオーストリアへと向かった。セバスチャンクルツ首相と会談し、離脱に向けて理解を訴える思惑があるようだ。同様に夏休みの1か月間メイ首相は英国内各地や欧州各地を訪問する方針だが、EUの首席交渉官バルニエ氏は26日に通商案の中核を拒否したばかりだ。先日訪英した米トランプ大統領からも通商案について酷評をうける中、英国内ではメイ首相の支持率低下に伴って強硬離脱派の新党ができるとの噂も浮上している。EU離脱交渉についての強硬離脱派の動きがより具体的にになれば、ポンド相場が軟調になることは不可避であろう。

(3)先週までの相場の推移

先週(7/23～7/27)の値動き: (対ドル) 安値 1.3072 高値 1.3213 終値 1.3111
(対円) 安値 145.27 高値 146.54 終値 145.51



4. 豪ドル

(1)今週の予想レンジ: 0.7300 ~ 0.7500 80.50 ~ 83.50 円

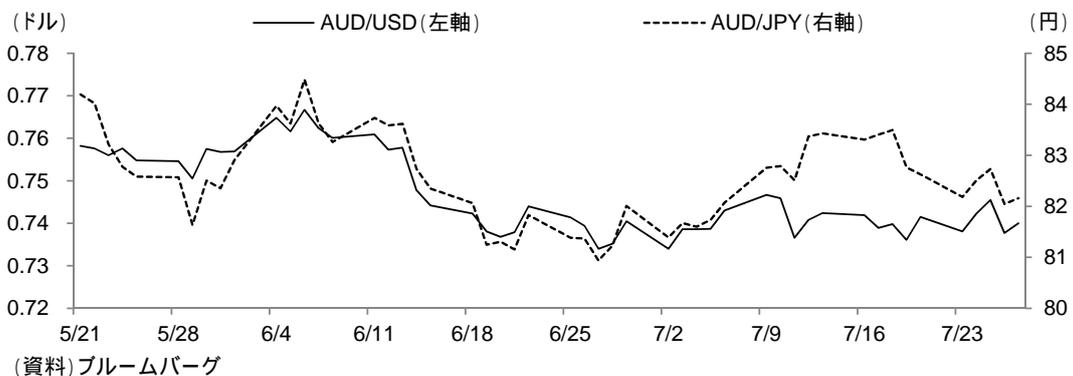
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドル相場は通商問題、人民元相場、および中国株式動向に振られる中、0.73~0.74台での方向感のない推移が続いた。23日に豪ドルは0.74前半でオープン。前週にトランプ大統領からドル高けん制発言が出ていたものの、豪ドル買いドル売りの流れは続かずLDN時間、NY時間と人民元主導でドルが買い戻される中0.73台へ反落。翌24日は0.73台での上値の重い展開が続いていたが、LDN時間に入りドル売り人民元買いの流れからマーケットのドル売りの展開に豪ドルは0.74台まで上昇。前日23日に中国国務院常務会議が協調的な財政/金融緩和を要請との報道から24日の中国上海株は大幅上昇しており、中国悲観論の後退も豪ドル反発の支援材料となった。25日は、注目されていた4~6月期CPIの結果はトリム平均値(前年比)が市場予想1.9%に対して1.9%の予想通りの結果となったが、前年比が市場予想2.2%に対して2.1%と下回るとマーケットは豪ドル売りで反応。一時0.74割れまで下落するも、トランプ大統領とユンケル欧州委員長とのあいだでの貿易戦争回避を目指すことで合意との報道から、貿易戦争リスクの後退を好感して豪ドルは0.7460付近まで反発。26日に豪ドルは週高値である0.7464をつけるも、ドル人民元が急反発したほか、前日まで堅調であった中国上海株も上値が重くなったことや、ECB後にEURが下落したこともドル買いの勢いを強め、豪ドルもレンジを抜けきれず再度0.73台へ反落。27日は、0.73台での小動きが続いていたが、米4~6月期GDPの数字が市場予想を下回ったことでドル売りの流れに、豪ドルも0.74台に反発、0.74近辺で越週した。先週の豪ドル/円相場は82円台でのレンジ推移となった。23日は日銀金融政策柔軟化の可能性を受けドル/円相場が下落、豪ドル/円相場82円後半から82円前半まで下落。翌24日に一時82円台を割れ81円台を試すも、中国上海株の上昇もサポートなり82円後半まで反発。25日は、市場予想を下回った豪CPIの結果に再度82円前半まで下落。その後、米欧の貿易戦争回避の合意の動きに82円後半を試すも、翌26日には再度反落し。そのまま上値が重いまま27日も推移し、結局82円前半で越週した。

今週の豪ドル相場は、引き続き0.73~0.74台中心の値動きを予想。引き続き主要株式市場や人民元相場に振られ、豪ドルの個別材料での値動きは限定的と考えている。ただ、先週中国政府の景気下支え方針が出ていることもあり、豪ドルに対して一定のサポート材料になると考えている。しかし、月末週であることや米雇用統計を控える週でもあること、および米中通商問題懸念が続くとみられる中、積極的に豪ドルを買っていく相場でもまだないと考えている。

(3)先週までの相場の推移

先週(7/23~7/27)の値動き: (対ドル) 安値 0.7359 高値 0.7464 終値 0.7404
(対円) 安値 81.81 高値 82.90 終値 82.16



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。